

# 1 キリスト教神学

## 第9章 神の特別啓示

一宮基督教研究所  
安黒務

### 2 「キリスト教神学」

#### 概略

1. 神を研究すること
  2. 神を知ること
  3. 神はどのような方か
  4. 神は何をなされるか
  5. 人間
  6. 罪
- 
7. キリストの人格
  8. キリストのみわざ
  9. 聖霊
  10. 救い
  11. 教会
  12. 終末

### 3 第二部 神を知ること

#### 概略

- 第8章 神の普遍的啓示
- 第9章 神の特別啓示
- 第10章 啓示の保存: 靈感
- 第11章 神の言葉の信頼性: 無誤性
- 第12章 神の言葉の力: 権威

### 4 序

1. 本章の目的
2. 本章の概容
3. 研究課題

### 5 第1節 特別啓示の定義と必要性

1. 特別啓示とは
2. 人間生来の制約 + 道徳的制約
3. 関係に関するもの - 人格的に知ること
4. 墮落後の現象 - "回復" という視点
5. 墮落 - 特別啓示の必要性、切実に
6. 「内容なき思想は空虚、概念なき直観は盲目」

### 6 第2節 特別啓示の様式

#### 特別啓示の人格的性質

1. 様式 = 性質・種類

1. 人格的なもの
2. 名前の告知
3. 人格的な契約
2. ユークリッド幾何学の公理のようでない
  1. 系統的神学的提示ではない
  2. 信条的宣言の体系化でなく
  3. 教条的な説明に終始していない

## 7 第2節 特別啓示の様式

### 特別啓示の人間の性質

1. 空間と時間を超えた存在
  1. 人間的な様式による啓示
  2. 人間の言語・思考・行動の諸形式
2. その時代の日常的言語の使用
  1. コイナー・ギリシャ語は特別な言語なのか？
3. ありふれた日常的経験を通して
  1. 夢
  2. 受肉 - 平均的人間、大工ヨセフの息子
4. 天からの声、しかし大部分は自然な出来事を通して

## 8 第2節 特別啓示の様式

### 特別啓示の類比的性質

1. 一義的言語と多義的言語の間
  1. 一義的用法の要素もちつつ、異なる意味ももつ
2. 一義的要素を選択
  1. ヨルダンのせきとめ...神と軍の工兵隊
3. 種類の違いではなく、程度の違い
4. 神は、類比の両サイドの意味をご存知
5. 神はすべてを完全に知っている

## 9 第3節 特別啓示の様態

### 歴史的出来事

1. 「歴史における啓示」の立場: ライト
  - 様態 = 方法・手段・様式
    1. 具体的な歴史という通路
    2. 一連の神的出来事
    3. 神の行為 - 神の性質の啓示
  - 1. 歴史における啓示: ライト
    1. 神の行為と人間の応答の記録
    2. 旧新約聖書を貫くケリュグマ
    3. 出来事は神の啓示、聖書記者の推論は訂正可
    4. ライト: 一貫性の欠如

## 10 第3節 特別啓示の様態

### 歴史的出来事

2. 「歴史を通しての啓示」の立場: 新正統主義
  1. 新正統主義の見解
    - 歴史的な出来事と啓示: 同一視すべきでない
  2. 出来事は啓示を包んでいる殻にすぎない
    - 神が現臨をやめれば、聖書は以前の状態に

3. 神は啓示において完全な主権者
4. 実在と真理は、“動的”なもの
  - 生起するもの
5. 歴史的批評の受け入れ、しかし出来事は啓示ではない

11  第3節 特別啓示の様態

歴史的出来事

3. 「歴史“として”の啓示」の立場: パネンベルク・サークル
  1. 歴史における神の行為
    - 象徴・比喻ではなく、文字通りのものとして
  2. あらゆる歴史を神の啓示とみなす
    - 普遍史を念頭に
  3. 歴史的出来事と関連した客観的な啓示

12  第3節 特別啓示の様態

神の語りかけ

1. 序
  1. 自分の創作ではなく、神からのものとしての意識
  2. 言語によって媒介された啓示
  3. 心のうちで神からのメッセージを聞く
  4. 解釈は単に聖書記者の洞察・熟考の産物ではない

13  第3節 特別啓示の様態

神の語りかけ

2. ジェームズ・バーの三つの指摘
  - 出来事と聖書記者の解釈の位置と関係
    1. 知恵文学の問題
      - 歴史や預言者の文学における信仰の型に適合しない
    2. 「歴史における啓示」の問題
      - モーセの解釈であり、神の啓示ではない
    3. 誰が創造に立ち会って、観察し記録したのか
      - 神からの啓示伝達も、神の行為による伝達
        - 両方とも真正な啓示の様式である

14  第3節 特別啓示の様態

受肉

1. 啓示のもっとも完全な様式
2. 出来事としての啓示 - 最も十分なかたちで
3. イエスの人格 - 文字通り完全
4. 行為としての啓示と言葉としての啓示 - 同時に

15  第4節 特別啓示: 命題的か人格的か

1. 神についての知識: 客観的で合理的な情報
2. 20世紀に広い支持を得た立場
  1. 新正統主義にも、教理的諸命題を認める余地
  2. 神についての、人間の可謬な証し
  3. キルケゴールおよび実存主義者の議論
  4. 主体的知識を強調、主観主義の震さける

5. 信頼するためには、まず信仰が
  6. 非命題的見解により、信仰に十分な根拠えられるのか
  7. 出会いで神を知る：判断する基準は？
  8. それはキリスト教の神なのか？
  9. それは神学の問題である：教理なしに説明不可
  10. 教理的言明と出会いの関係性
3. われわれ：どちらかではなく、人格的でもあり、命題的でもある
    1. 「我と汝」と「我とそれ」
    2. 神についての真理 - 非人格的なものと断ずる必然性なし

16



## 第5節 啓示としての聖書

1. 命題的真理 - 保存が可能
2. 「啓示される過程」か「啓示されたもの」か
3. 「話すという動作」か「話された内容」か
4. 命題的啓示の否定 - 言語の捉え方狭すぎる
5. 啓示が命題的 - 靈感されたものか？
6. 啓示の“漸進性”
  - 以上 - 啓示のふたつの側面
    - 「神の人格的現臨」と「真理の情報」